

岳俳句の現在 十二月

(508)

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。俳句の読みの大切さを痛感している。自分の俳句の読みをいうのではない。俳句は読みあつての文学ではないか。詩も短歌も優れた鑑賞書はある。が、俳句は鑑賞によって原句以上に俳句が立つことが多い。俳人の多くは俳句があればいい。鑑賞を施さねば判らない俳句は二流。このような俳人が多いことは承知しているが、俳人は本当にしっかりと俳句を読んでいるのだろうか。俳句は読みによって深まる文学だと私は最近とみに思う。「鑑賞学」とでもいう学問が俳句に関しては必要ではないかと思っている。

迢空忌——山川草木に靈性を見た詩人

流れ藻に日の斑添ひゆく迢空忌 久根美和子

九月三日は歌人折口信夫、釈迢空の忌日である。国文学や民俗学の大成者としても名高い。流れ藻とは海草のほんだら（本俵）の類が海流により千切れ、海浜を漂うもの。私は上掲句から海辺を漂流する光景を連想するが、野川に流れる水藻に日の斑が揺らめくさまを想像する人もあろうか。「添ひゆく」というささやかな表現からそんな気がはたらく。名高い「葛の花」の名歌、「葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」から迢空像を描けば、漂泊詩人の面影は上掲句に見事に収まる。過不足ない句であるが、

そこが幾分の物足りなさでもある。

実を飛ばすまでの穂草のど根性 堤 保徳

表現には気取りが無い。「穂草のど根性」との、いわば穂草の「思想」を強調しようとしたもの。枯れに枯れ、穂から草の実を飛ばし、子孫を野に撒き散らせば一生の使命は終わる。それまでの風雪に耐えた草の蔓延り根性は「ど根性」と地に張り付いたいい方が相応しいとみたのである。俳句に思想性がある。性根の据わった作者である。

身に入むや晩年いよよ笹枕 志摩 晴樹

「笹枕」とは流浪の旅の象徴。どこか島崎藤村（本名は春樹）流の「千曲川旅情の歌」の風情を連想させる。「草枕」の言い古されたいい方ではなく、「笹枕」の軽さが身に沁みる。もとより心情の表現であるが、寄る辺を失くした漂泊の思いはニヒルな乾いた心情ではない。縋れるものには縋り尽くした果ての一途な求道暮しから、娑婆に戻った感じ。重みから軽みへ。文人風な詠い方であるが、清冽さがある。

そのかみの鷹雑炊に黄の箸 眞榮城いさを

宮古島では戦後食糧難の時代、島へ落伍した鷹を雑炊にして食べたとか。「黄の箸」を用いるのはなぜか。呪いか。柳

宗悦ではないが箸の文化の背景を知りたい思いに駆られる。

退く波に反骨の眼や野分雲 原田 宏子

なかなか引いていかない波か。台風前の波にまで反骨をみる在野の逞しさに注目した。地域の暮しがいきいきした存在感を保つのは反骨精神が確かな時期であろう。中央集権への反骨ばかりではない。自分たちの未熟さへの自虐的な反骨でもある。それでいながら結構明るいのである。

なりふりを構はず生きて真葛原 丸山 貴史

真葛原を置いたところに大志が滲む。建設関係の空調や水回り等裏方的な仕事の技術者としてベテランである。優れた

今月の秀句

満蒙に水澄むことのなかりけり 矢島 恵

「水澄む」とは風土へのリアルな見方よりも心理的な感情移入が強い表現である。レスが舞い立つ黄土に覆われた満州には日本本土のような「水澄む」繊細な小景は想像し難い。同時に、満蒙と呼ばれた日本統治の植民地十三年間は、ときに東の間の幸せ感に浸った日本からの移住者はあったであろうが、所詮、原住民満人の土地を奪った抑圧政策のものであり、平和な季語「水澄む」とは相容れない。上掲句はさりげない表現ではあるが、痛恨の句である。懺悔の作である。

歌い手としても周知。その中でよく俳句実作者としての努力を重ねてきた。掲句は来し方のすべてへの率直な実感であろう。胸を打つ。夫人の公子さんともども人のために尽くす。「岳」や地域の文化にとり中堅として貴重な存在である。

秋深し仏心盈てる百合の木よ 山田 一政

掲句は角館の河原田家の百合の木詠とか。主の次繁は盛岡高等農林での宮澤賢治の級友。大正九年に賢治が結婚祝いに百合の木を贈った。私もチューリップ形の花を付けた、この百合の木を角館で仰いだ。晩秋に「仏心」を感じたといわれると、スーッと気持が透明になる感じ。不思議な木だ。

神農のひよこひよこ歩く豊の秋 長尾裕美子

神道学にくわしいとうかがっている。上代、人民に農を教えた神さま（日本では少彦名）「神農」が秋の田野を歩き廻る幻想は、豊年だけに、神さまも我が意を得たりとの思いなのであろうか。地に根ざした不思議な感動がある。

日の暈をつき抜けてくる雁の棹 菅原砂登子

風景にドラマがある。天気が変わる兆しの日の暈を、渡り来る雁が一直線に抜けてくるという。みちのく岩手のスケールが大きな天空が詠われ注目した。地貌を感じる。

鬼やんま約束のない指先へ 珠風 夕波

二十歳代は約束で雁字搦め。指切りの指も忙しい。こっちはだめ、この中指に止って。若手には鬼やんまいうことを

聞くから不思議。人気の作者。蜻蛉もよく人を見るらしい。

かまつかや夫の臉をなでしのみ 轟 房子

かまつか（雁来紅）をみるとユーラシア大陸が偲ばれる。雁が渡り来る頃真赤になる。冬の到来の予兆のはげしさだ。哀しい句だ。末期に長年連れ添った夫の臉を撫でて、それだけ。人生とは、夫婦とは、愛情とは、別れとは、死とは。

国持たぬ民の誇りとは――銀河降る荒野の緊急な課題

国持たぬ民の眠りに降る銀河 桑原 淑子

「民の眠り」を焦点に据えるならば、アフガンのような国をなさない崩壊国家を念頭に置いたものか。餓死すれすれの毎日。そこでは、銀河が齎すメッセジは希望ではない。残酷そのもの。翻って、人間百年のいのちをどう考えるか、日本の高齢社会が取り上げる真っ当な話題さえ恵まれた国の贅

今月の秀句

星飛ぶや生きるにあまた削ぎ落す 西牧千恵子

人生後半生の生き方を自問している。見えてきた行く末とはいえ、削ぎ落した「夢」としかいい得ない種々への思いは揺曳している。しかし、流星を仰ぎ、これが宿業のような人生だと考えれば、これに最善を尽くす以外にない。哀しくも強く逞しい決意が生きる底辺にあるう。

言に思われる厳しい現実が世界には多い。俳句で社会問題を詠えというのではない。俳人も視野を広げ、現実への関心を持つことが要求される時代になっている。

銀漢や未来の吾に書く手紙 佐藤 由美

少年少女が二十年後の自分のために書いて記念のカプセルに納め展望台の地に埋める。しばしば出会う話だ。掲句は大袈裟なものでなく、例えば五十年後の自分を想定して書く。とりわけ女性は今後に託す思いが広く、銀漢を望むような遥けさへの憧憬があるのではないか。なぜか胸が熱くなる。

秋の川流れ来しものみな納め 桢木 幸子

かつて私も秋田の雄物川河口で「雄物川海へ貢ぎて秋のこゑ」と詠んだ。私の場合は秋の日本海が雄物川を呑み込む姿への感動であった。掲句は秋の大河が支流の河川を包含する懐の大きさを捉えている。構想は変わらない。共感する。

神様の花火や天に鞠をつく 田村 道子

詩人の感性は明るい。作者は詩集を何冊かもつ詩人であるだけに、俳人にはないことばへの自在さがある。「天に鞠をつく」表現には、童画に近い知性の遊びがある。情念を切る思い切りがいい。しつこさがなくところが成功しているが、句によっては纏まり過ぎるところが物足りない。変貌を求めて体当たりの模索をしている。

子が走り母その後を蝶嵐追 篠遠 良子

元気な山村の母子。母は昔、地蜂採り（蝶嵐追）で鳴らし

た村でも周知の手が付けられなかった女傑。今や子が母の血を引く。子が出かけると母はうずうず。後を追う。いかにもありそうな句。作者は作句にものおじしいところがいい。

常総の作間稼ぎの秋蚕かな 田添 博美

常陸から房総にかけて農閑期に秋蚕を飼った。江戸時代からの古風な表現に魅力がある。これも地貌の力ではないか。

与れぬ己が幕引き敗荷 山崎 妙子

枯れて無惨な蓮田を見ての感慨。ごもつともでござす。

目覚むれば其処はまた夢虫すだく 添田 朋子

眠れない夜に夢をみる。夢か現か。また夢を見る。熟睡ができない。が、寝てはいる。若さと老いとの競合の時期か。

鰯雲夢ばかり追ひ戻れざる 荻原 昭廣

現実をみつめよなどという者に限って夢もみみっつい。早々戻らなくてもいいのではないか。

持て成しは利根の育ちのとまり鮎 野村 紘一

秋になり産卵のために川の下流に下る鮎が「とまり鮎」。客人への持てなしに愛情が籠る。中七音の調子が弾む。

鮎落ちる頃や郡上のつむぎ機 平野 規子

手厚い岐阜の暮しがある。物産展風ではなく、大事にした気持ちから、落鮎の自然と地場の仕事を提示している。

空谷は霧を押し出す獵始 志田 成

何も無いがらんとした霧の谷。獵銃音が轟く。獵解禁日。生存意識とか空しさとかややこしいものを一切排除した無私の世界を捉えている。ただし、平穏な自然の風景ではない。

青雲集

里神楽舞座一疊踏み鳴らす 上石 哲男

里神楽は民間の神楽。宮崎の高千穂神楽が名高い。神楽の舞人は一疊が舞台のすべて。そこでの演技に精魂をかける。表現の切れがいい。芸の深みを畳一疊で捉えるのが巧い。

日を透かし風揺らしる薄かな 宮澤 朝子

薄が主語。すべて薄が采配を振う。日も風も薄のままに。

水澄んで草一本を大写し 森 千恵子

何にも言っていない。描かれたのは草一本。無。それが秋。

焼きばつたからだに利くと幼き日 田中ヨウ子

素朴この上ない。泣けるほど質素。飛蝗を焼いて食べた。からだに滋養があると親が言い子が食べる。日本人の暮し。

推敲・添削 83 ●●●●●●●● 宮坂 静生

○このように推敲し添削する

語順を考えことばにリズムが生まれる工夫をする

原句 父母に励まざる夢吾亦紅 小川 博子

添削 夢に父母励ましくるゝ吾亦紅

「励まざる夢」は「励まさ」（四段動詞未然形）＋「る」（受身助動詞終止形）なので、「夢」に接続するには「励まざる夢」となる。中七音には収まらない。「冗漫だ。そこで「夢」を初めに語順を変えて、調子よい表現にする。

原句 夕食中異臭と土石秋豪雨 飯田 都子

添削 食事中秋の豪雨の土石流

今秋、川が暴れ土石流に襲われた恐ろしい体験詠である。

しかし、原句はことがらだけで俳句ではない。このような自然災害を表現するには句材と表現の工夫が必要だ。添削もことがらだけを羅列したのみで恐怖はわかるが詩情は乏しいか。

原句 燈下親し藤村泊の宿のランプ 上江洲萬三郎

添削 藤村にゆかりの宿や燈下親し

「藤村泊の宿のランプ」はことばがごちゃごちゃしてリズムが悪い。そこで表現しようとするをやさしく言い換える。

原句 朝露や初めての旅美ヶ原 秋野美津子

添削 初めての露の美ヶ原かな

「朝」「旅」が削れないか。「初めての」といえばすべて了解できる。できるだけ省略したい。

原句 塩辛蜻蛉都心になじみほしいままに 福田登美子

添削 都心にも塩辛蜻蛉ほしいまま

「なじみ」が要らない。ほしいままに飛んでいるだけ。

原句 水澄むや安堵状は蔵の中 瓜田 紀子

添削 安堵状は蔵の中なり水澄める

原句は中七が一音足りない。気になるので語順を変えた。

俳句はことばの凝縮が大事。一字でも緊張感が出る工夫を。

原句 虫の音や沖の神島灯を小さく 内田 周穂

添削 虫の音や沖の神島灯の小さし

句末が「小さく」よりも「小さし」の方が句に張りがある。

原句 つるべ落しの街は影絵に音も消え 馬場 慧子

添削 つるべ落しの街は影絵となりにつり

「音も消え」がない方が、読み手はいろいろな連想する。

原句 名月にギター弾く手に小夜の曲 佐藤 悦雄

添削 名月やギターにのせて小夜曲

句材がいい。作者はギターの名手と聞く。「弾く手に」を軽くリズムカルに表現する。「や」切れが効果をもたらす。

原句 金木犀小花舞い落ち黄金みち 同

添削 金木犀黄金つもれるみちつゞく

「黄金みち」とあれば、道一面の落花は連想するから「小花舞い落ち」は省略できよう。

原句 寂しさを小さく語る野菊かな 工藤 君子

添削 寂しさを語る野菊の揺れいたり

野菊を想定すれば「小さく」は要らない。